2024年2月18日 久宝教会 受難節第1主日礼拝メッセージ

「人はパンのみにて生くるにあらず」　　牛田匡牧師

聖書　ヨハネによる福音書 4章 1－11節

先日の 14 日の水曜日から、今年もイエス様の生涯や、十字架の受難の意味について思いを馳せる「受難節」に入りました。そして今回の「荒れ野で試みを受ける」という聖書の箇所も、受難節の始めに読まれる箇所として、3 年前の礼拝でも読まれていました。その当時は、新型コロナウイルス感染が拡大している時で、大阪府に 2 度目の「緊急事態宣言」が出され、様々な活動が自粛されていた時期でしたし、また福島県沖で震度 6 強の大きな地震があり、再び東日本大震災の時のように津波があったり、今もなおメルトダウンしたままで放射能を出し続けている福島第一原子力発電所が、更なる破損や汚染を拡大したりしないかと怯えていた時期でした。そしてそのような社会の状況から、「今この時も、私たちはすでに受難の時代に生きているのではないか」とメッセージの中で述べられていました。あれから 3 年が経った今、3 年前に比べて何かが改善され、好転したでしょうか。確かに人類にとっての未知のウイルスであった新型コロナウイルスに対する知見は蓄えられ、治療薬も開発され、日本の感染症分類も 2 類から 5 類に変更され、今では「ただの風邪」扱いにされていますが、それでも感染が無くなったわけではありません。地震について言えば、お正月の能登半島地震で被災した被災地の復旧作業は、まだまだ難航しており、電気や水などのインフラが戻らずに、避難生活を余儀なくされている方々がまだ何万人もおられるとのことです。それらのことを考えただけでも、私たちが今なお「受難の時代」に生きていることは、変わらない現実なのだろうと思わされています。

さて、イエス様は、洗礼者ヨハネによって、ヨルダン川に沈められた後（マタイ３章並行）、ガリラヤの町や村を回っての宣教活動を始められる前に、荒れ野で悪魔から試みを受けられました。2 節には「40 日 40 夜断食した」とありますが、実際にそんなことをしたら、人はみんな死んでしまいます。この「40 日 40 夜」というのは、「ノアの箱舟」（創世記 7 章）のお話で、世界中に大雨が降って大洪水が起きた時に、大雨が降り続いた日数のことですから、要するに「まるで永遠に続くかのように思われる程に果てしなく長い期間」を表す表現だと考えられますし、「出エジプト記」でモーセに率いられてエジプトを脱出した古代イスラエルの民が、「40 年間」に亘って荒れ野を旅したというのも、同様だと考えられます。ですから「40」という数字は、言い換えれば、それまでの過去と断絶するような、圧倒的な出来事、

自分たちの人生にとっての大きな転換点を表わしているのではないでしょうか。

そして空腹を覚えられているイエス様の所に、「試みる者」が近づいてきて言いました。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ」（3 節）。出エジプトの荒れ野の旅の中で、モーセは渇きや空腹を訴える民のために、神に祈り、飲み水を湧き出させたり（出エジプト 17 章）、天からのパンとして地表にマナを出現させたりした（出エジプト 16 章）という言い伝えがありましたから、同じように「イエス様にもできるでしょう」という悪魔の試みだったのかもしれません。しかし、それに対してイエス様は「人はパンだけで生きる者ではなく、神の口から出る一つ一つの言葉によって生きる」（マタイ 4:4）と答えられました。昔の文語訳だと、「人はパンのみにて生くるにあらず」です。ではパンのみではなく、「神の口から出る言葉によって生きる」とは何でしょうか。保育園で子どもたちに「人はパンだけ食べていたらいいのかな」と尋ねると、賢いみんなは「パンだけでも、お菓子だけでも、あかんで。お野菜も、お肉も、好き嫌いせんと食べな、元気になられへんで」と教えてくれます。つまり「大好きなパンだけを食べていたら、栄養が偏ってしまうから、色々なものをバランスよく食べないといけないよ」ということを、古代の人たちも言っていたのでしょうか。それとも「物質的なものよりも、精神的なものの方が大事だ」ということを、言っていたのでしょうか。どうもそんなにも単純なことではなさそうです。

ここでイエス様が引用された「人はパンだけで生きる者ではなく、神の口から出る一つ一つの言葉によって生きる」（マタイ 4:4）という言葉は、ヘブライ語聖書の「申命記」8 章 3 節の言葉の引用ですが、その前後には次のように記されています。

> [2] あなたの神、主がこの四十年の間、荒れ野であなたを導いた、すべての
> 道のりを思い起こしなさい。[3]（主はあなたに）マナを食べさせられた。人は
> パンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべてのものによって
> 生きるということを、あなたに知らせるためであった。[4] この四十年の間、あ
> なたの着ていた服は擦り切れず、足は腫れなかった。

つまり、古代イスラエルの民が、エジプトを脱出した後の 40 年間の荒れ野の旅において、必要な物が必要な時に必要なだけ備えられたことを思い出しなさい、ということです。またヘブライ語では口や目など、体の一部部分で体全体、その人の存在全体を代表して表現しますから、「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべてのものによって生きる」というヘブライ語の表現は、言い換え

るならば「人は神から与えられる全ての出来事によって生かされている」ということなのだと理解することができます。

そのヘブライ語が、ギリシア語に翻訳されて福音書に記される際に、「『口から出るもの』は『言葉』だろう」ということで、「人はパンだけで生きる者ではなく、神の口から出る一つ一つの言葉によって生きる」（マタイ 4:4）と記されたのだと思いますが、ヘブライ語では「言葉（ダーバール）」はそのまま「出来事」を表す語でもありますから、「聖書の御言葉は私たちの命の糧ですから、頑張ってたくさん聖句を暗唱することは良いことです」というのは見当違いで、むしろ「パンだけではなく、太陽も雨も風も、食べ物も着る物も、住む所も、家族も、友だちも、全ては神様から頂いているものだ、それらの恵みによって初めて人間は生かされているということを忘れないようにしてください」ということなのだと思います。そしてまた、私たちの現実社会では、目に見えるパンに代表される、モノや金が人を支配するために用いられています。神の恵みによって生かされていることを忘れて、モノや金で人が人を支配することを許してはならない。また石をパンに換えるような奇跡で人をたぶらかすことはしない、ということです。

次に、悪魔はイエス様を荒れ野からエルサレムの都にある神殿の屋根の上に連れて行きました。そして詩編の言葉を引用しながら、「神の子なら、飛び降りたらどうだ」と言いました（マタイ 4:6）。ここで悪魔が引用している詩編 91 編は、いつでもどのような時でも神様が守ってくださるという内容の歌ですが、それに対してイエス様も「あなたの神である主を試してはならない」と言って断りました。もし実際に、神殿の屋根から飛び降りたら、大けがをするでしょう。「普通の人にはできなくても、神の子にはできる。またここは神殿だから奇跡が起こる。さぁ奇跡を起こして見ろ。そうすれば本当にお前が神の子だと信じてやろう……」。そのような話は、イエス様の時代から 2000 年を経た今日でもなお、無数にあると思われますが、そのような奇跡をウリにした宗教や商売は、紛れもなくカルト宗教だと言えます。しかし、イエス様はその誘いも断りました。「神殿で、奇跡が起きるか起きないか、それが大事なことではない」……。

最後に、悪魔はイエス様を高い山の上に連れて行きました。そして目に見える全ての国々とその繁栄を見せて言いました。「これを全部与えよう。ただし私を拝むなら」。日本語訳では「もし、ひれ伏して私を拝むなら」が先になっていますが、原文でも英語でも「これを全部与えよう」が先です。お腹を空かせた人の前にたくさんのごちそうを並べて、「好きなだけ食べていいよ。ただし私の言うことを聞くなら

ね」と言うような、何とも厭らしいものの言い方です。きらびやかな栄華、繁栄を見せて、「欲しいか、欲しくないか」と迫って来ます。しかし、イエス様はその悪魔の誘惑も斥けられました。「神の恵み、神の力はきらびやかな繁栄の中にはない。むしろそれらの対極にある世の低み、見捨てられたと見なされているような底辺から、神の力は立ち上がるからだ」。そして、その後イエス様は、荒れ野での試みを通して明らかにされた通りの姿勢で、ガリラヤの方々を巡り、行く先々で世の低みに置かれた人たちと共に歩まれました。

ここで「サタン」というヘブライ語で書かれている存在は、ギリシア語では「ディアボロス」と訳され、日本語では「悪魔」と訳されています。それは私たちを「試みる者」であり、「誘惑する者」であるわけですが、私たちの何を試みたり、私たちを何に誘惑しているのかというと、それは「間に投げ込む（ディア・バロー）」ということ、「分断させる」ということです。全てのものを上と下や右と左に分け、優劣をつけ、良し悪しの評価をつけます。神からの祝福を受けられる人と、逆に呪われる人を区別し、モノや金や力を持てる人と持てない人とを区別し、差別します……。この地上では目に見える形として、パンにばかり目が行ってしまいがちですが、本当に大切なものはパンだけではありません。目に見えるモノばかりに目を注いでいる限り、そこには本当の命の神の働きは見出せないのではないでしょうか。私たち自身が時として、悪魔によって試みられ、そしてまた悪魔のように自分や他人を分断し、裁いてしまっていることがあるのではないかと思います。命の神の働きは、どこに働いておられるか。イエス様は今、どこにおられるか。そのことを問うことが求められているように思います。

「人はパンのみにて生くるにあらず」。神から出る全てのもの、全ての恵み、全ての業の中に生かされている……。能登半島地震の被災地には、全国各地から多くの方々が、支援に現地入りされているようです。私たちの教会からクリスマス献金等で応援している「神戸国際支援機構」からも、早速「第一次能登半島地震ボランティア報告」の活動報告が届きました。そのような支援者の方々の働きもまた「神の言葉」の一つです。その一方で「万博の成功が、被災者の方々を勇気づける」と詭弁を弄して、お金も建築資材も、作業に携わる人手も不足しているにも拘わらず、大阪万博を強硬開催しようと強弁している人たちは、それこそ悪魔からの誘惑を受けていると言えるのではないでしょうか。私たちは何によって生かされているか。何が最も大切なことか。そのことを心に留めながら、私たちは今日もここから歩み出して参ります。